月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.
159



あの名盤のリパッケージ版が手に入る
貴重なチャンスを見逃すな！
「ミュージック・フロム・イースⅢ」
レビュー

新たな父親キャラの登場で
あのロイアスがついに……？
も～っと集まれ！ ファルコム学園

ファルコムニュース
英雄伝説 碧の軌跡
ショートストーリーズ

ヴァン＆アニエスが引き続き登場！
新バトルシステム情報も!?

『英雄伝説 界の軌跡』

FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

英雄伝説 界の軌跡 -Farewell, O Zemuria-

『軌跡』シリーズ最新作となる『界の軌跡』の続報がついに到着！　メインキャラクターとして、『黎の軌跡』で主人公を務めたヴァンとアニエスが引き続き登場することが明らかとなった。さらに、フィールド＆コマンドバトルそれぞれに新システムが追加され、戦闘がより快適に。また、今作をプレイする上で見逃せないキーワードもチェックしていこう。



メインキャラクターの情報がついに到着！ 新システムや気になるキーワードも要チェック！

Prologue

「120X年、全てが終わる」

ゼムリア大陸の終焉を予言した
導力革命の父、C・エプスタイン——

その"Xデイ"が差し迫るなか、
崑崙の地に築かれた巨大基地から
一基の導力ロケットが打ち上げられようとしていた。

「人は大気圏外へと辿り着けるのか？」
「大陸の果てには何が在るのか？」
「人類は"世界"の真実を識ることができるのか？」

有史以来の大事業を見届けようと全世界が注目する中、
技術的特異点（シンギュラリティ）とも言うべきオレド自治州のとある場所には
《裏解決屋（スプリガン）》の青年をはじめ
各地からの勢力が集結しようとしていた——。

果たして、
遥かなる天を目指す一筋の軌跡はゼムリアの未来となるのだろうか……

それとも——

英雄伝説 界の軌跡 -Farewell, O Zemuria-
発売日：2024年　**ジャンル**：ストーリーRPG　**価格**：未定

ヴァン・アークライド

（CV：小野大輔）

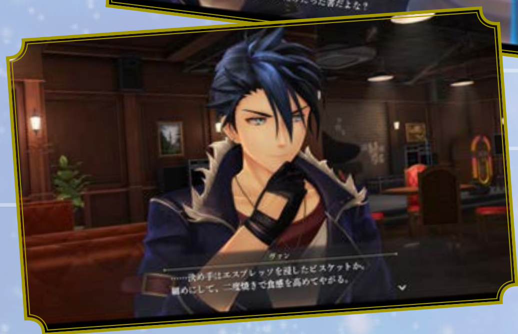
年齢：25歳

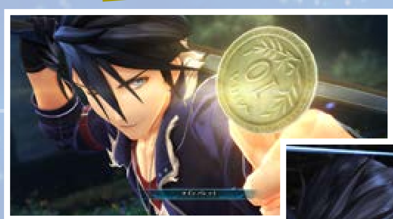
表社会と裏社会の狭間で迷う者たちを助ける《裏解決屋（スプリガン）》を生業としている青年。天涯孤独の身であるためか、ドライで現実的な性格に思われるが自分なりの流儀で判断するタイプ。（ただし好物のスイーツで判断がブレる危険性あり）魔王の依代として生まれながらに《魔核》を宿していたが、自身と分離した魔王との直接対決の末、《魔核》を世界の狭間に封じ込めることに成功した。

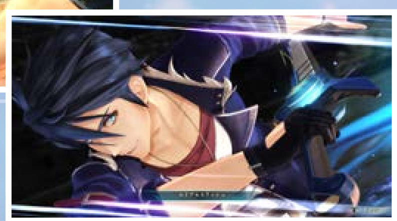


「自分から逃げるか、向き合うか――
決められるのも結局はてめえ自身だからな。」









アニエス・クローデル

（CV：伊藤美来）

年齢：17歳

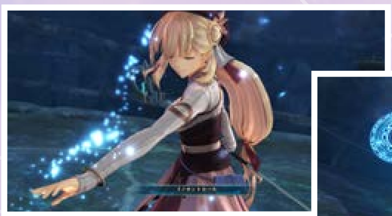
清楚可憐な雰囲気の中に強い意志を覗かせる、名門校《アラミス高等学校》の２年生。曾祖父の遺産である導力器《ゲネシス》の捜索をヴァンに依頼したことがきっかけで、《アークライド解決事務所》のバイトとして働くようになった。共和国各地に散らばっていた８つのゲネシスを集めるという当初の目的は達成したが、仄かに想いを寄せるヴァンのもとで現在も事務所のバイトを続けている。

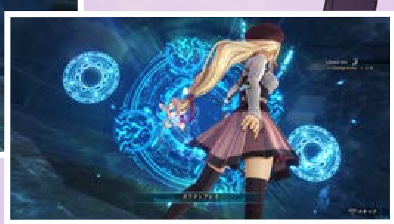


「だからヴァンさん……
大切な人を想うのに、後悔なんてしないでください。」









ベルガルド・ゼーマン

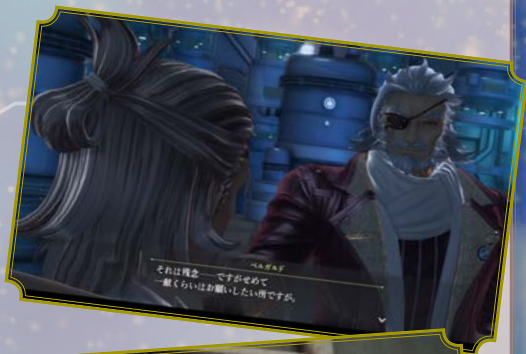
（CV：大塚明夫）

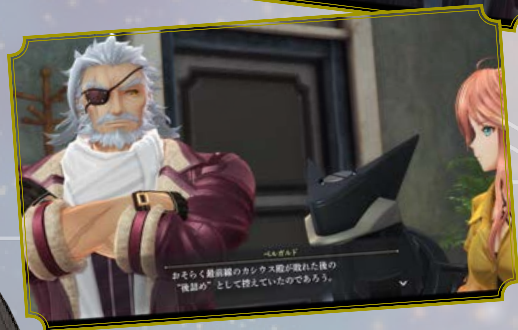
年齢：69歳

かつて七耀教会で巡回神父を務めていた、筋骨逞しい老人。東方三大拳法《崑崙流》の達人として大陸各地に数多くの弟子を持ち、ヴァンにとっては大切な師匠であり恩人。特異な経歴を持つヴァンの身を心配しつつも厳しく指導し、人生の師として様々な面で導いてきた。共和国で起こった事件の解決後、とある理由で大陸東部に赴いていたが、再びヴァン達に合流し、力を貸していくことに。



「よもやおぬしがここまで成長しようとは…
師父（しふ）冥利に尽きるとはこの事だ。」





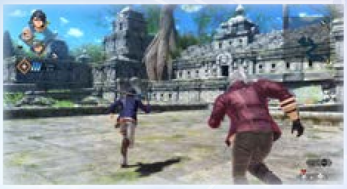


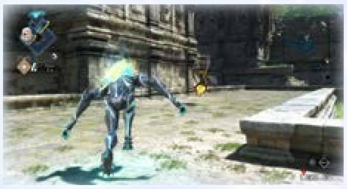
フィールド&コマンドバトルに新要素が追加!

【覚醒】&【B.L.T.Z.(ブリッツ)システム】とは?

フィールドバトルがより有利に展開できる【覚醒】

【覚醒】は、グレンデル化ができるヴァンや、聖痕を持つ守護騎士といった一部のキャラクターに用意されたシステムで、フィールドバトル中にブーストゲージを消費することで覚醒状態となることができる。覚醒状態となると、一時的に戦闘能力が大幅アップするので、圧倒的に有利な状況で敵を攻撃することが可能になるとのことだ。ブーストゲージはフィールドにあるブレイクオブジェクトを破壊することで回復することができるので、地形や状況を上手く使い、覚醒状態をキープしながら戦うことを心がけよう。





【S.C.L.M.(スクラム)】がより進化した【B.L.T.Z.(ブリッツ)】システム

【B.L.T.Z.】は、『黎の軌跡』シリーズにあった【S.C.L.M.】をより進化させた新システム。コマンドバトル中に AT ボーナスの「ブリッツ」を得た状態で、通常攻撃やクラフト、アーツなどを行うと「B.L.T.Z. チェイン/ B.L.T.Z サポート」が発動する。また、【S.C.L.M.】は攻撃系の強化のみだったが、【B.L.T.Z.】は回復・補助系のクラフト、アーツも強化される。さらに、アイテムの使用時にも適応されるので、CP や EP がない状況でも戦況を一気に覆すこともできるようになったので、攻撃以外の使い道もどんどんと開拓していこう。













これをチェックして新たな物語に備えよう！

KEYWORD



スターテイカー計画

第 23 代大統領ロイ・グラムハート主導のもと、カルバード共和国が水面下で準備を進めていた国家規模の大プロジェクト。
前人未到の領域である“大気圏外の空間”に導力ロケットで通信衛星を打ち上げ、最終的には有人宇宙飛行を成し遂げるという。
超高高度からの地表観測による環境問題への対策、衛星による新たな導力通信網の確立などが計画の意義として語られている。

ゼクー宇宙軍基地

共和国南東、イシュガル山脈奥地の広大な盆地に建設されたスターテイカー計画実行のための大規模施設。
計画が正式発表されるまで、その存在は国家最高機密として徹底的に秘匿されていた。

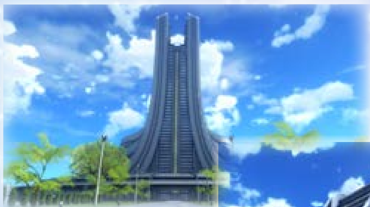


オレド自治州



ゼムリア大陸中北部に位置し、レミフェリア公国、カルバード共和国と国境を接している自治州。
共和国北部の都市メッセルダムよりも更に北に位置しているにも関わらず気候が温暖なため、古くから独自に農業を発展させてきた。
州の大部分を農地が占める牧歌的な地域として知られているが、近年ではマルドゥック社の本社が置かれるなど、外資系資本による影響も強まりを見せている。

マルドゥック総合警備保障





近年急速な成長を見せている民間軍事会社（PMC）。
非常に高度な技術を用いた戦闘装備や導力設備を保有・運用しているが、その多くが出所不明になっている。

ゼムリア大陸全体の最新マップも到着!!



Nintendo Switch版
『英雄伝説 黎の軌跡II』が7月25日に発売決定!



今年２月にNintendo Switchで発売された軌跡シリーズ第９作目となる『英雄伝説 黎の軌跡』。その続編となる『英雄伝説 黎の軌跡 II』が７月25日に発売されることが決定した。折しも今号で最新作『界の軌跡』で『黎』主人公のヴァンが登場するとが発表したばかりだけに、その発売までにぜひともプレイしておきたいところだ。



英雄伝説 黎の軌跡 II
for Nintendo Switch
ジャンル：ストーリーRPG
対応機種：Nintendo Switch
発売日：2024年7月25日
価格：【パッケージ版】5,280円（税込）
【ダウンロード版】5,280円（税込）

7月25日にはPlayStation 5／PlayStation 4『英雄伝説 黎の軌跡』&『英雄伝説 黎の軌跡II』のスーパープライス版も登場!

さらに同日には、PlayStation 5／PlayStation 4でお得な値段で楽しめる「スーパープライス版」の発売も決定。まだプレイしていない人はこの機会にぜひゲットしよう。





英雄伝説 黎の軌跡 スーパープライス
ジャンル：ストーリーRPG
対応機種：PlayStation 5／PlayStation 4
発売日：2024年7月25日
価格：【パッケージ版】5,280円（税込）
【ダウンロード版】5,280円（税込）

英雄伝説 黎の軌跡 II -CRIMSON SiN- スーパープライス
ジャンル：ストーリーRPG
対応機種：PlayStation 5／PlayStation 4
発売日：2024年7月25日
価格：【パッケージ版】5,280円（税込）
【ダウンロード版】5,280円（税込）



◎フィールドワイ公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp

◎ファルコムブックス公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp/falcombooks

★ウォーゼン家の家庭の事情。★



自立できない子



一族みな家族



親子の再会



伝播する捏造



闇と光と


あの…そろそろ助言とやらを
おおそうだった済まねぇな～
率直に言えば原因は息子を甘やかしてきたお前ら家族だろ～
ビシッ
ううっ!
息子本人より闇が深いぜぇ～
ギュボボボー!!
ああすみません我々一家は指をさされるとめっちゃ光る体質なのです
世が世なら「ドラスレショック」などと言われアニメも放映休止されたことでしょう
ギュボボ!
目があぁ
目があぁ

親離れ子離れ


つまりロイアスをもっと突き放せ…と?
そうそう子供なんて思ってるよりたくましいもんだぜ～?
うぅーんしかし…
ほれほれそういう所だぜ～子離れしろよ～
親はなくとも子は育つって言うもんな
めそめそ
そんなこと言わないでくれよ～
どっちなんだよ

流行系


ロイアス…
私たちは決心した
今日という今日は
部屋から追い出すわ…
ロイアスのへや
な…なんだよ急に
みんな雰囲気が
おかしいぞ?
あっわかった!
今流行りの
追放系って奴だな
?
つい…何だって?
ロイアスのへや
オリピエ王子と
ファン王子みたいな
人のことよきっと
それは通報系かな
ロイアスのへや
なるほど

甘口と辛口


追放系っていうのは
仲間から無能と思われて
追い出されるんだが…
ざまぁ
追い出してからそいつの
有能さに気づいて後悔する
っていう物語の定番ネタさ
ロイアスのへや
立入禁止
つまり最終的に俺を
この家から追い出して
捨ててしまう気だな!
ロイアスのへや
勝手に入るな
立入禁止
やれるもんならやってみろ
みんな後悔させてやるぜ!!
大丈夫だロイアス
私たちはそこまで
考えてはいない
えーそうなのかァ
甘いなお前ら~
それにお前を追い出しても
私たちは絶対後悔しない
自信があるもの
うん
うん
ロイアス
…と思ったら
すげえ辛口だな~

本気VS本気



来たるべき日



年長者の説得



精神的狂戦士



憧れの家族旅行



天罰の閃光



穏やかで騒がしい生活が戻ってきたファルコム学園。
徐々に英雄、戦士、さらには曲者までが還ってくるなか、
新たに「イースⅨ」のキャラクターも参戦！
まだまだ止まらない異能・新久保だいすけの筆が冴え渡る！

おまたせ！待望の第2巻だよ！



も〜っと集まれ!
ファルコム学園②

新久保だいすけ

定価：本体 900 円＋税
ISBN 978-4-8021-3213-8

発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp/falcombooks

FB ファルコムBOOKS

英雄伝説 零の軌跡

四つの運命

著者：田沢大典　イラスト：松竜



日本ファルコムの大ヒットRPG『英雄伝説 零の軌跡』から、ロイドたち特務支援課の過去エピソードを描いたオフィシャルノベライズ。ゲーム本編では語られなかった名シーンの裏側やキャラクターそれぞれの心情が今、明らかになる！

原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）

価格：1,155円(税込)
ISBN:978-489610-215-4

全国書店にて大好評発売中!!

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル

フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

タピオカ「軌跡シリーズ」新グッズ続々登場！

株式会社タピオカさんから、「軌跡シリーズ」より新グッズが続々登場。予約受付中！



【軌跡シリーズ グリッターアクリルブロック Vol.2（6種）】
発売日：2024年8月下旬



【軌跡シリーズ グリッターアクリルブロック Vol.3（7種）】
発売日：2024年9月下旬



【英雄伝説 創の軌跡　回転アクリルスタンド（3種）】
発売日：2024年7月下旬



【英雄伝説 創の軌跡　推しブレスレット（3種）】
発売日：2024年7月上旬



【英雄伝説 閃の軌跡IV」より ケープたぴぬい 第2弾】
発売日：2024年8月下旬

販売ページ
https://tapioca.co.jp/products/list?category_id=276

《OMNI SHOP 常春セール》開催中！ ファルコムグッズが大量にラインナップ！

工画堂スタジオさんのオンラインショップ「OMNI SHOP」にて《常春セール 2024》が開催中です。

■**セール開催期間：**2024年5月31日（金）16:00まで

工画堂スタジオ
https://www.kogado.com/sw/contents/hotnews/24spring_sale_7a6gjN.htm

OMNI SHOP
https://omnishop.kogado.com/items.php?ct=5&kw=



「空の軌跡」POP-UP STORE開催決定！通販予約受付中！

「英雄伝説 空の軌跡」20周年を記念したPOP-UP STOREが開催決定。エステル＆ヨシュアの描き起こしイラストを使った胸アツなグッズが勢ぞろい！
また、新作グッズは通販でも先行販売中。メモリーブロックと彫刻ボトルは通販限定なのでお見逃しなく。







■**POP-UP STORE開催期間：**5月3日（金）～5月15日（水）
■**メモリーブロック・彫刻ボトル 受注期間：**5月15日（水）まで

販売ページ
https://eeo.today/store/101/specialfeature/sora20-popup

カーテン魂 「創の軌跡」香水登場！

カーテン魂さんより、『英雄伝説 創の軌跡』から『リィン』『クロウ』の香水が登場。
※期間限定受注商品となりますのでご注意ください。





■**受注期間：**
2024年5月15日（水）23:59まで
→発送時期：2024年7月16日～7月25日

特設サイト
https://www.curtain-damashii.com/fragrance_hajimari/

カーテン魂
https://www.curtain-damashii.com/item/tag/falcom/

Nintendo Switchに登場！EGGコンソール『ドラスレファミリー MSX2』配信開始

Windows向けレトロゲーム配信サービス・プロジェクトEGGのNintendo Switch展開である“EGGコンソール”に『ドラゴンスレイヤーIV ドラスレファミリー MSX2』が登場！





■**配信日：**2024年4月11日（木）
https://store-jp.nintendo.com/list/software/70010000078993.html

イースシリーズ第3弾。リメイク最新作を迎える前に触れておきたい、その源流。

かつて日本ファルコムはキングレコード内で独立したレーベルを持ち、幾多のアルバムを制作してきた。1999年には提携を解消しファルコム自社運営へ移行するも、キング時代の作品もサブスクなどで聴けるよう環境整備を推し進めている。がしかし、現物を手元においておきたいのがファン心理というもの。今回、PS4/5『イース・メモワール -フェルガナの誓い』に特典として付属される『ミュージック・フロム・イースIII』は、そんな人々の願いを叶える復刻アルバムである。

text by 井上尚昭(ゲーム音楽ディスクガイド)

現在は『イース -フェルガナの誓い-』として展開されている作品の原典となるのが、1989年に発売されたPC-8801版『ワンダラーズ・フロム・イース』である。『イース』シリーズはこれまで、1987年の初代『イース』、1988年の『イースII』とPC-8801を代表するアクションRPGとしてパソコンゲーム界に大きな足跡を残してきた。主人公アドルをとりまく物語は、当初そこで完結する予定であったが、別企画をイースシリーズとして稼働することとなり、派生作のような形で『ワンダラーズ～』と題して発売される。この時、小さく"イース3"と副題的に添えられていたのだが、ユーザー間の通称として用いられ、またX68000版のサウンドトラックが『イースIII J.D.K.スペシャル』とされていく中で、PCエンジン・CD-ROM^{2}移植時に『イースIII』が正題に。これを2005年にWindows向けに3Dでリメイクしたのが『イース -フェルガナの誓い-』だ。そして、それを元に、今回再びリメイクされるのが『イース・メモワール -フェルガナの誓い』となる。ゲームシステムを大きく変えながらも音楽はPC-8801版から引き継がれており、魂の源を辿るべく購入特典として付属されるのが、PC-8801版の音源を収録したアルバム『ミュージック・フロム・イースIII』というわけなのである。

PC-8801版の音楽は、PC-8801mkIISRに搭載された音源チップ、YM2203（FM音源3音+SSG3音）にて演奏されている。『イースII』まではこの2作は見下ろし型の画面構成をとっていた為、RPG感覚でプレイした人も多かったと思うが、3作目は横スクロールへゲームシステムを変更。同じアクションRPGと言えど"アクション"側の比重が高い。従って、音楽もハード路線へシフトされ、終始ボス戦を強いられているかのような緊張感がプレイヤーを刺激する。勇壮なポップロック路線で固まりつつあった『イース』の音楽世界を大枠で維持しつつも、要所で前向きに壊しにかかるのが本作であり、1面BGM「Be careful」から繰り出されるヘヴィなギター表現に驚かされる。中ボスで使用されるM-9「漆黒の魔獣」などはスピードメタル文法の高速曲で、寧ろボス戦にあたるM-13「死神の電撃」の方がテンポは抑えめの設計。中ボスの段階で早々に、音でプレイヤーを仕留めにかかる。異彩を放つのがM-12「暗黒の罠」の組成で、意表をつくドラムの休符やベースライン（これは時に、ピアノの左手の役割も果たす）によってジャズ



■商品情報
イース･メモワール -フェルガナの誓い-
●パッケージ版初回特典
「ミュージック・フロム・イースⅢ 復刻リパッケージ版」
●ダウンロード版 早期購入特典
「ミュージック･フロム･イースⅢ」

●発売日：2024年5月23日発売
●ジャンル：アクションRPG
●対応機種：PlayStation 5 ／ PlayStation 4
●プレイ人数：1人
●価格：パッケージ版 4 ,840 円（税込）
ダウンロード版 4,840 円（税込）
●CEROレーティング：B（12才以上対象）

タッチのボトムを形成しつつ、ベースが主役になったかと思えばピアノの横槍が入ってアバンギャルドな応酬を重ねる。これにPC音源らしいピコピコシーケンスを乗せるという不思議な取り合わせが、ゲームならではの特異な音楽を生んだ。

音楽に時代性を加味してこなかった過去作と比べ、今作はヨーロッパ中世期を意識的に音で匂わせる部分が出てくる。山小屋のM－4「静かな刻」、ショップBGMのM－5「Welcome!」、M－18「慈愛の祈り」など、バトルパート外では、チェンバロやオルガンで奏でられる教会音楽の色合いが強い。物語の導入部となるM－2「予感〜スティクス〜」や最終決戦地への道中で聞かれるM－19「光りの鍵」などは、音色面でのその主張は薄いものの、バロック期の弦楽曲などで感じられるリラクシングミュージックの効能を果たしている。エンディングとなるM－25「旅立ちの朝」は時代を先に送って、80年代イージーリスニングの様相だが、教会フレーズからの解放が物語の終焉と重なる。

ところで当時のパソコンゲームでは、プレイ前に一度ユーザーディスクを作成するという手順を踏む必要があったのだが、この少し時間のかかる処理中に流すM－1「Dancing on the road」なる曲は、村人が集落でフィドルなどを携えて演奏する情景が浮かぶ、陽気な中世のトラッドミュージック。世界観への導入剤として、そのコーヒータイム的なアプローチも面白いところで、今となってはユーザーディスクを作成する必要はなくなるものの、『イース -フェルガナの誓い-』における「Welcome!」の編曲思想などに継承されている。

〈イース〉シリーズはこの後、「Ⅳ」以降も制作を重ねていくのだが、プラットフォームをパソコンから家庭用ゲーム機へ移し、再びパソコンの世界に戻って来た時には、既にウィンドウズOS時代。生演奏音楽がそのまま使える仕様の為、これが〝FM音源でプレイ出来る最後のイース〟となった。1989年に発売されたサウンドトラックは、サブスクなどで音源自体を聴くことは可能であるものの、CDはとうに廃盤となり入手しづらい状況が続いている。今回の特典ではそういった方々の欲求に応えるため、当時の音源を発掘、復刻したCDがパッケージ版にのみ付属する。（ダウンロード版購入の場合は、早期予約者のみデータによる音源提供）。最新形のフェルガナプレイの前夜に、改めてその起源に手招きされてみてはいかがだろうか。



◉フィールドワイ公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp
◉ファルコムブックス公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp/falcombooks


FB ファルコムBOOKS
これを読むまで
しぬでないぞ!!
『月刊 Falcom magazine』に掲載された読み切りコミック 13 本を完全収録したコミックアンソロジーがついに登場！　新旧ファンも納得のラインナップで贈る、ファルコム愛溢れる1冊を是非ご堪能あれ！
カバーは『英雄伝説空の軌跡』コミカライズを担当した啄木鳥しんき先生の豪華描き下ろし♪
好評発売中!!
ふぁるこむコミックざんまい
収録テーマ作品
『イース』
『ブランディッシュ』
『ヴァンテージマスター』
『くるみん』
『ザナドゥネクスト』
『軌跡シリーズ』
価格：本体920円＋税
ISBN 978-4-89610-818-7
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp

特務支援課メンバー
4人のことがもっと
好きになる！

英雄伝説 碧の軌跡
ショートストーリーズ



©DAISUKE TAZAWA , GAOU

エレボニア帝国とカルバード共和国という二大国家に囲まれ、激動の中心地となっていたクロスベル自治州を舞台とする『零／碧の軌跡』。今回は、そこで様々な壁を乗り越えていったロイド・バニングスらクロスベル警察特務支援課メンバー４人の様々な一面を見ることができる『英雄伝説 碧の軌跡ショートストーリーズ』より「エリィの章」をお届け！

製品情報

好評発売中

著　　　:田沢大典
イラスト:がおう(Ga-show)
定　　価:1,200円(税別)

エリィの章

あの日から、私の世界には色がない。父が家を出た後、母が実家である帝国の地方都市に戻っていった日から。
母が私をクロスベルに置いていくと言い残し、私はそれを素直に受け入れた。父がいなくなってからの母は子どもの私から見てもつらいほど疲弊していたし、このままでは本当に「ダメになってしまう」と思ったから。
でも、おじいさまの家に連れてこられたあの日から、私の世界には色がなくなってしまった。そう、本当に色がないのだ。
色鮮やかに咲いていたマリーゴールドの花も、毎朝お手伝いさんが入れてくれる紅茶も、見上げる度に晴れやかな気分になるはずの空も、すべてがモノトーン。
でも、別になにも不都合はなかった。文字は読めたし、ご飯も食べられる。ただ、世界に色がない、それだけだ。
お医者様に見てもらおうかとも思ったけれど、家に来たばかりでおじいさまに迷惑をかけるのもどうなのかと思ったので、控えておいた。
ただひとつ不都合があるとしたら、おじいさまに花や絵画を指し示されれて、ごらんエリィ、美しいだろう？　と問われた時だけ。色がないというのは、これほどまでに味気なく、美しさというものをはいでしまうのかと思えた。でもそれもすぐに「ええ、おじいさま」と

言えば問題はないのだと気づいた。
そうして私は日々を暮らしていた。ただ、ひとりきりのモノトーンの世界の中で。

†

我が家の地下には、代々の当主とバトラーしか知らない、秘密の部屋がある。
ワインセラーの奥にある隠し扉を抜けた先にあるその部屋は少々かび臭いものの、不思議と落ち着く空気があった。
導力ランプのほのかな明かりにぼうっと照らし出されたその部屋の壁の一面には本棚が並び、いつの時代のものとも知れぬほど古めかしい本が並ぶ。反対側には、フラスコやアルコールランプ（導力を使わない、とんでもない年代物！）が並び、まるで実験室のような様相だ。
そう、ここは実験室だった。錬金術の。
クロイス家の代々の当主は、次の当主に錬金術の秘技を教える。そうして何世代にもわたって秘技を受け継ぎ、常人が一代ではたどり着けない高みに至るのだ。

そして私、マリアベル・クロイスも例に漏れず、錬金術の秘技を学んでいた。
最初は父、ディーター・クロイスから教えられた。錬金術の基礎の基礎。物質・触媒・変化・錬成……これらを私はあっという間に理解してしまった。父は私を天才だと褒めそやした。そう、確かに私は天才だったのだろう。現に、父の教えではすぐに満足できなくなり、自分で本棚に埋まっていた書物を取りだし、読みふけるようになった。こうなっては、父の出番はない。私は夜な夜なひとりで、秘密の地下室に籠もるようになった。

残念ながら、父は天才ではなかった。いや、錬金術の才能においては凡庸以下と言ってもいい。でも父は商売人としての才覚は充分以上にあった。錬金術を学びながらも、導力革命の機運をすぐに察知し、自身が持てる金銭と人材をそこに投入した。おかげでクロイス家は父の代で一気に繁栄し、私はこうしてなんの苦労もなく暮らすことができる。

それに父は私を愛してくれている。普通の父娘の関係以上に愛情を注いでくれていることは、買ってもらえるドレスの数や、受けた教育の質・量を見てもあきらかだった。おかげでこうして、子どもとは思えないほど大人びた思考もできるのだから。

ただ、それと錬金術の才能は、まったく別だ。そしてクロイス家当主に本当に必要なのは、その父が持ち得なかった才能であることも、また。

本棚に詰め込まれた書物を読みあさり、気づいたことがある。書物に書き込まれたメモの

数々。あるいは、何代か前の当主がまとめたであろうノートに、さらに別の当主が注釈を書き加えたもの。その内容は様々であったが、彼らの想いは共通していた。
高みへ。遙かなる高みへ。
父が最初に言っていた『クロイス家の使命』。しかしそれを実感したのは父の言葉ではなく、この秘密の部屋にため込まれた、膨大な先代たちの執念すら感じる記録からだった。
そして彼らがその高みを目指したのも、よく分かる。現実とはなんともつまらなく、人々はなんとも愚かしい。もちろん彼らは優しく、温かく、愛すべき存在なのかもしれない。しかし人は時に度しがたいほど愚かで残酷だ。彼らにつき合い続けていれば、永遠に地べたを這いずり回り、遙かな高みなど目指しようもない、と最近強く思うようになっていた。
……なんてことを日々考えているけれど。こんなこと、誰にも言えっこない。言ったところで大人たちは怪訝な顔をするだけだし、ましてや同じ年の子どもたちには、理解もできないだろう！
だからといって、それをとがめるつもりはない。彼らには無理なのだ。それが現実。
ただ、時々無性につまらなくなる。この世界に、私の心をときめかせるものは、錬金術以外には何もないのだと思い知ることが。

†

おじいさまの誘いで、パーティーへとやってきた。
「同じ年の子どもたちも来る。友だちができるかもしれない」
おじいさまはそういってくれたが、あの子たちは私などには興味がないようだった。
そんなものだ。私だって、見ず知らずの子がいきなり来て「友だちになりなさい」なんて言われても困ってしまう。
特にその子が、ただ黙って困ったような笑顔を向けるだけなら、なおさらだ。
結局その子たちは私と二言三言かわしただけで、すぐにどこかにいってしまった。
「今日もごきげんとり」
などと言っていた気がするので、お小遣いをくれるようなお金持ちのおじさんでもいるのだろうか。
私はひとりで壁際に立ち、料理を少しずつ食べていた。たぶんおいしい料理なのだろうが、なにせ色がついてないので、気分的には炭でも食べているような感じだ。
たまに優しげな若者や、世話好きなおばさまが声をかけてくれるが、私が名乗ると、その

髪の色を見て、わずかに眉をひそめたり、口角が微妙に上がる。そしてすぐに、「ひとりでつまらなくないかい？」とか「パーティーを楽しんでいってね」などと当たり障りのないことを言って立ち去るのだ。

こういう時、私はいやでも自分の生まれを考える。現クロスベル市長の孫であり、失脚し国を追われた元政治家の娘。それがこの場での私であり、エリィというひとりの女の子のことなど、どうでもいいのだと。

そんなことを考えていたら、食べていた料理がますます味がしなくなってきた。

もういいや、と食べかけのお皿を置き、私はきらびやかなパーティー会場を抜け出した。

廊下は部屋の中とは打って変わって静かで、人気のなさと相まってとても居心地のよい空間だった。

でも、ちょっと広すぎて落ち着かないな。そう思いながら、廊下に据えつけてあったいすに腰掛ける。ようやく一息つけたような気がして、私はふう、とため息をついた。

†

うるさい。

私はそう心の中で吐き捨てた。

パーティー会場はにぎやかを通り越してただ騒音を垂れ流すスピーカーのようだった。

部屋はゴージャスという意味を取り違えた花でかざられ、無駄に見栄えに凝った料理が大皿に並び、年甲斐もなくキラキラしたドレスを着飾ったおばさまたちがケタケタと笑う。

なんと醜悪な極彩色の世界だろう。

美しい花々も、きらびやかなドレスも、私にはなんの価値もない。極彩色の世界はただうるさく、煩わしい。なぜ静謐で美しいものがないのだろう。地下室にある結晶標本のように、単色でありながら、目もくらむような美しさを感じさせるものがないのだろう。

なんともつまらない世界だ。

そして私のまわりでおべんちゃらを並べ立てる、同じ年ぐらいの子どもたち。

彼らは親に言われて、私に取り入ろうとしているのだろう。それはさぞ効果的なのだろう。

私が天才でなければ。

なにせ私のお父親は、飛ぶ鳥を落とす勢いで成長を続けるＩＢＣ（クロスベル国際銀行）の総裁だ。

次々と伝統ある企業や商店を買収し、資金援助し、成長させる。その手法は新世代の寵児

だともてはやされていた。そう、お父様はお金を稼ぐことにかけては天下一品なのだ。
そんなＩＢＣ総裁の娘に取り入ってコネクションを作り、恩恵にあずかりたいという人間は山ほどいる。
そして子どもには子ども同士の方が仲良くできるはずだ、と思いこむ。
なんと浅はかな思考だろう。
そうでなくても、子どもというのは演技ができない。「親に言われていやいやつきあっている」と顔に書いてあるようなものだ。そんな相手と話していて、気持ちがよいはずもない。
いくら子どもだからといっても人をバカにしすぎている。
しかしそれでも彼らは必死だ。親に気に入られたいから？　おもちゃを買ってもらえるから？　事情は知らない。けど、私がそれにつきあう必要もまた、ありはしない。
「マリアベルちゃん、今日もキレイね！」
「ねぇマリアベルさん、今度ピアノを聴きにこない？　僕のお母様がとても上手でね。きっと気に入ると思うんだ」
「ずるいわ、私もマリアベルさんをおうちにご招待したいのに。ねね、私の家にはバラ園があるのよ！　色とりどりのバラがね」
私はすっと立ち上がった。彼らの口が止まり、視線が私の顔に集まる。その間抜けな顔を

ゆっくりと眺め回し、
「申し訳ありません。少々用事がありますので、これで失礼いたしますわ」
そう言って立ち去った。むろん、追ってくるものなどいない。ここで追ってくるような空気の読めない子どもは、私に取り入るなどという高度なことはできないからだ。
らんちき騒ぎを続ける会場から一歩廊下に足を踏み出す。会場への扉が閉まると、騒ぎも遠くさざめきのように聞こえてきて、これならかんに障ることもないな、と思えた。
それにしても、と廊下の真ん中で立ち尽くす。
「用事って、なんなのかしら」
そうひとりつぶやいて、クスリと笑う。そう、別に用事などないのだ。ただひとりきりになりたかっただけ。
廊下をゆっくりと歩くと、毛足の長いカーペットに靴が埋もれて、これはこれで悪くない感触だった。
わずかに香る、少し湿った臭いはこの建物からだろうか。古さの証だが、嫌いではなかった。むしろここは、秘密の地下室を思い起こさせる。
私は少し愉快になりつつも、急にあの地下室に行きたくなった。
しかしそのためには帰らなくてはいけない。さすがにパーティーはまだ中盤、お父様は今

帰るわけにはいかないだろう。
なんとかひとりで帰らせてもらえないだろうか？　少し具合が悪いと演技をする？　いやしかし、そんなことをすればきっとお父様は私についてきてしまう。その程度には溺愛されていることを認識しているし、そのことがうれしかったりもするのだ。
そんな時に、きらり、と何かの輝きが目に飛び込んできた。
なんだろう？　一瞬だったが、とても美しく、それでいてけばけばしくない、透明感すら感じるようなきらめきだった気がする。
そう思いながら光を感じた方を見ると、一体の等身大の人形がイスに置かれていた。
まず目に飛び込んだのは、美しいパールグレイの髪。そして整えられた顔立ち。目を閉じるタイプの顔は珍しかったけれど、そういうタイプのドールも見たことがあったから別段気にならなかった。というよりも、あまりの美しさにそんなことなど気にならなかった。
けばけばし過ぎる極彩色の世界の中で、その人形だけがひんやりとした真珠の輝きをまとい、シンプルにして繊細な美しさを持っていたからだ。それは私の世界になかったもの。欠けていたものそのものだった。
私はふらふらと、その人形に吸い寄せられるように近づいた。近くで見ると、衣装もかなり良いものだと気づいた。決して華美ではないが、上等な生地が使われている。このドール

の持ち主は、さぞ大事にしているのだろう、ということがわかる。
それにしても、と私はドールの顔にキスせんばかりに近づきながら思う。目を閉じているだけでこれだけ美しいのだ。目を開けたら、さぞ美しいのだろう、と。下手をしたら、恋をしてしまうかもしれないほどに。私の家には、お店が開けるほどのドールがあるけれど、かわいいと思いこそすれ、恋をしてしまうほどのものは未だお目にかかっていなかった。
そう、もしかしたらこれは、運命の出会いなのかもしれない。だとしたら、なんとしても家に連れて帰らなくては！　この家の主とお父様は懇意だったかしら？　いいえ、たとえ懇意でなかったとしても、連れて帰ってみせる！　そのためには手段など選んでいられない！
と、意気込んで鼻息を荒くしていたら。
すうっと、人形の目が開いた。
美しい髪の毛と同じ、真珠色の瞳。まるで生気を持ったかのような、理知的でキラキラとした瞳。
ああ、いけませんわ。
そう思った時にはもう遅い。私は、恋に落ちてしまった。



†

気づいたら、うとうとしてしまっていたらしい。人の気配というか、息づかいに気づいて目を開ける。ぼんやりとした頭で、目の前にあるものは何かと考える。

そこにいたのは、見事な黄金の髪の毛を持ち、驚くほど大きな瞳を持つ、可憐な女の子だった。

「あ……」

「……あ？」

「あなた……人形じゃ、ありませんの？」

女の子の第一声、その内容を理解するのに、少し時間がかかった。

「人形……？」

どこかに人形でもあるのだろうか。私がここに座った時には、なにも置いていなかった気がするけど。

「ごめんなさい、よく分からないのだけど」

ぽーっとしている様子の女の子を見て、ちょっと不安になってきた。

「あの……もしかして、あなたのお人形がここにあったのかしら？　見かけなかったけど……もしよかったら、一緒に」
探しましょうか、と言いかけたところで、彼女がガッと手を掴んできた。文字通り、ガッと。
「お名前は⁉」
「え？」
「お名前、なんと言いますの⁉」
「え……エリィ、よ」
マクダエルの名前を出そうかと少し迷っている間に、彼女がしゃべりだした。
「エリィ……ああ、なんと美しい名前でしょう！　気品がありながら愛らしく、まさにあなたにぴったりの名前ですわ！」
自分の名前をこんな風に褒められたことがなかった私は、うれしくなる前に驚いてしまった。おそらく目をぱちくりさせていたであろう私に向かって、彼女が続ける。
「私の名前はマリアベル。マリアベル・クロイスですわ」
「マリアベル・クロイス」
「ええ！」
クロイス、という名前に聞き覚えがあった。確かそれは、最近頻繁に新聞に出ていたような。

しかし、私が思考する前に、彼女の声に遮られてしまった。
「ベル、と呼んでくださいな」
「えっ」
「だって私たち、お友だちでしょう？」
いつの間にお友だちになったのだろう。ついさっき出会ったばかりだと思うのだが。
「さ、呼んでくださいな、ベルって」
「でも、マリアベルさん」
「もう、ベルですわ！」
ちょっと拗ねたように頬を膨らませる。さっきから見ているけど、驚くほど表情がコロコロと変わる子だ。そしてその表情どれもが生気にあふれ、まぶしいぐらいだ。黄金の髪の毛も、やや紅潮した頬も、彼女のあふれる生命力を表している。
と、そこで気づいた。
「色……」
色がついているのだ、彼女には。もしかして、とあたりを見回したけど、相変わらずまわりはモノトーンの世界だ。
「どうなさったんですの？　急にキョロキョロと」

そう言ってきた彼女をじっと見つめる。モノトーンの世界の中にひとりだけ、鮮やかに輝く色をまとった存在を。
そこで私は忘れていたことに気づく。
ああ、色があるということは、こんなにも素晴らしく、美しいのだ、と。

†

急にあたりを見回していた彼女が、私をじっと見つめる。
そのまなざしに、ドキリと胸が高鳴る。
ああ、エリィの瞳は光の当たり方で緑がかって見えるのだな、などと、どうでもよいことを考えていた。
（それにしても……なんと美しいのでしょう。これこそまさに、私が求めていた美、そのものですわ！）
ここまで私をときめかせてくれる人がいることが、ただ純粋にうれしかった。

彼女に見とれていた私にかわって、エリィがつぶやく。
「忘れてた……」
「え？」
「ううん。あなたがとても綺麗だなって」
そう言って微笑んだ彼女の笑顔は、それはもうとびきりで。
いても立ってもいられず、気づいたら私は彼女を抱きしめていた。
「ちょ、ちょっと、あの⁉」
「エリィ〜！」
「あ、あの、マリアベルさん、その、こういうの、恥ずかしい……」
耳元でもじもじと言う彼女の声がこそばゆく、私はさらに強く彼女を抱きしめる。
「ベル、と呼んでください！」
「あの……」
「ベルと呼ばない限り、離しませんわ！　ふふふ……！」
そう言って私は笑う。心から笑ったのは、いつ以来だろう。
「……わかったわ。お願いだから離して、ベル」
エリィが私の愛称を呼んでくれたことを確認して、抱きついていた身体を離す。でも、今

度は手をしっかりと握りしめた。
少し戸惑ったような顔をしているエリィに、私はにっこりと微笑みかけた。
「それじゃあまずは、お父様にご紹介しますわ！」
「え……あっ、ちょっと！」
エリィの返事を待たずに、彼女の手を引く。あの騒がしいだけのパーティー会場も、彼女といれば全然平気だ。
私は空いているもう片方の手で、パーティー会場への扉を開けた。

†

彼女に手を引かれ、パーティー会場へと舞い戻る。
やはり世界はモノトーンだったけど、そこにひとり、色をまとった少女がいる。
エネルギッシュで、表情豊かで、かなり強引で。
私が色を無くしてしまってからはじめてできた、お友だちだ。

†

日曜の朝。朝食を手早く済ませたエリィは、お手伝いさんに見送られながら家の玄関を出た。そこへ弾んだ声がかかる。

「エリィ！」

門の向こうで、金髪の巻き毛の女の子が、振り切れんばかりに腕を振っている。そんな彼女がおかしくて、ついクスリと笑いながら、小走りに彼女の元へと駆け寄る。

「おはよう、ベル」

「もう、待ちくたびれてしまいましたわ。エリィってば、じらすのがお上手ですわね」

「そんなつもりはないのだけど……」

ベルと呼ばれたのは、マリアベルだ。日曜の朝とは思えないハイテンションな彼女にやや気圧されつつ相づちを打ちながら、エリィは教会への道を歩き出し、マリアベルも横に並んで続いた。

パーティーでの出会いから、ふたりは親友となった。正確に言うと、マリアベルが一方的に親友呼ばわりしていたのだが、友人として少し接した時点で、エリィの方も驚くほど自然にそのことを受け入れるようになっていた。

「エリィ、今日学校が終わったら、少しお出かけしません？」

「今日はダメよ。おじいさまが早く帰ってくる日だから」

「えぇ～⁉」

不満そうに頬を膨らませるマリアベル。年頃の少女らしいしぐさだが、彼女がこんな表情を見せるのは、エリィの前でだけだ。

「その代わりといってはなんだけれど。うちでお昼を食べていかない？」

「よろしいんですの⁉」

「ええ」

「喜んでお招きにあずかりますわ！」

そう言ってエリィの腕に自然と自分の腕を絡めるベル。エリィは少し驚いてベルに抗議をした。

「もう、ベル」

「急に腕を組むな、でしょう？　ですが、許可を取ろうとしてもエリィは許してくださらな

いんですもの」

マリアベルがエリィに顔を近づけて甘えた声を出す。エリィからするとちょっとスキンシップが過剰すぎるのではないか、とも思うのだが、マリアベルが言うには『親友ならこれぐらいは当然のこと』らしい。

そう言われてしまうと黙るしかない。なにせ、エリィは親友と呼べるほど親しい友人をこれまで持ったことがないのだから。

現市長の孫娘という立場がそれをなかなか許さなかったのもある。だが、すべてを家庭環境のせいにしてしまえるほど、エリィは幼くも愚かでもなかった。一番大きな要因は、一定以上の関係になると壁を作ろうとしてしまう自分自身のせいだと、知っていたからだ。

それはマリアベルも同様だった。もっとも、彼女の場合は基本的に自分以外の人間は付き合うに値しない、と思っていたところがあるので、寂しさなどはまったく感じてはいなかった。ただ、つまらないとは思っていたらしい。現にこうして、自分が心から親友と呼べる存在を持った途端に、毎日がこんなにもウキウキと楽しいのだ。だからスキンシップもちょっとやりすぎてしまうのだけど、それはそれで仕方のないことだ、とマリアベルは考えていた。エリィの都合はあまり考慮していなかったが。

「うふふ……」

「どうしたの、急に？」
「私、毎日が最高に幸せですわ！」
マリアベルが突然言い出したことを、エリィは否定しなかった。ただ笑顔を見せ、少し歩きづらそうに教会への道を歩いていた。

†

礼拝が終わり、授業の時間。
教会に併設された教室には、十数名におよぶ生徒達が集まっていた。みな、このクロスベル市に住む子供達である。出自も様々で、エリィやマリアベルのようなよいところの子息から、クロスベル市内でお店を営む者の息子、他の国からクロスベルに赴任してきた企業に務める親を持つ娘、中には旧市街の近くからわざわざ来ている者もいた。
女神エイドスの恵みはあまねく人々に降り注がれるべき、という教えから、教会は日曜学校の受け入れについて特に制限はもうけなかった。そのため、こうして様々な階級の子供達

が一同に揃うこととなる。

上流階級の一部には、私塾や家庭教師をつけることを選ぶ人々もいたが、エリィとマリアベルはふたりとも日曜学校に通っていた。

エリィの場合は、祖父ヘンリーの『垣根なく多くの人と交流すべき』という教育方針から日曜学校に通うようになっていた。マリアベルは、父ディーターが慈善事業の一環として多額の寄付を教会にしているから……というのもあるが、だいたいはエリィと机を並べて勉強したいから、である。

これほどバラエティに富んだ生徒達が集まるので、なかなか授業はうまく進まない事が多い。そのため、各自が自習をし、分からないところを教えあう形式が多くはなる。

「ですから、ここの代入式を、こう入れるんですわ」

「えっと……」

エリィとマリアベルは机を寄せて、算数の勉強をしていた。エリィが問題を解いているのを、マリアベルが覗き込む格好だ。といってもふたりがやっているのは算数と呼ぶには少々高度なものだったが。

「ここの数字が６だから、倍になって……ｘは１２、かな」

「そう、正解ですわ！　さすがはエリィ！」

ほめそやすマリアベルをちょっと困った笑顔で見るエリィ。
「それじゃ、後は練習問題を解くわね。ありがとう、ベル」
「もうお教えしなくていいんですの？」
名残惜しそうに言うマリアベル。
「だって、私に構っていたら、ベルが勉強する時間がなくなっちゃうじゃない」
そういうとマリアベルは、甘いですわ、と前置きをして話し始めた。
「この程度の数式なら、目をつぶっていても解けてしまいますわ。今さらやるところじゃありませんもの」
さすがに目をつぶっては問題が分からないので解けないのではないだろうか、とエリィは心の中でつっこむ。
「でも、自習用にって持ってきてた本があったでしょう？」
そう言ってエリィは、マリアベルの手元にある本に目を落とした。分厚い本に『導力技術基礎概論』と書かれたそれは、明らかに子供が読むような本ではなかった。
「あぁ、これはいいんですのよ」
その本のページを少しつまみ、ほおづえを突きながらペラペラと興味なさそうにめくる。
「一応基礎もちゃんと勉強しておこうと購入したのですけど、だいたい分かってることでし

たわ。まったく、読んだ時間を無駄にしてしまいましたわね」
その言葉を聞いてエリィは目を丸くした。導力技術と言えば、今や自分達の生活には欠かせないものだ。導力灯から鉄道まで、ありとあらゆるものを駆動させるチカラ。それが導力技術だ。それを基礎とはいえだいたい把握しているという。
「すごいわね……ベルは」
「え？」
「私も算数は不得意ではないと思ってたけど、ベルのはレベルが違うっていうか……ううん、私なんかと比べちゃいけないわよね」
「まぁ、レベルが違うのは確かですわね」
マリアベルは悪びれずさらりと言う。
「私ほど頭の良い子供が何人もいたら、世界はもうちょっとマシになってますわ」
その言葉には、なんの気負いも誇張もない。ただ、ありのままの事実を淡々と述べているだけ。エリィはマリアベルの、こういう物言いが出来るところが、自分と一番違うと感じていた。だからこそ、彼女にだけは嘘偽りなく自分の思ったところを話せるのだ。
「確かに。でも、私以外の人にそういうこと言うと、嫌われちゃうわよ」
「かまいませんわ。私はあなたただひとりに好かれれば、それで充分！」

そう言ってマリアベルは、右手でエリィの右肩をそっと抱いた。
「ちょ、ちょっとベル」
「さ、次はこちらの代入式に挑戦ですわ！　大丈夫、さっきの問題が解けたのなら、楽勝です」
あくまでべったりとコーチをするつもりだと分かり、エリィは小さなため息をついた。

自習の時間が終わると、シスターによる授業の時間となる。
この時間は、みなが席に座り、シスターの話を聞く。シスターの話は多岐に渡り、女神エイドスの教えから、歴史、社会、国語、時には音楽なども教える。今日の授業は歴史だ。
しかし今、教室内に響いているのはシスターの声ではなく、エリィの声だった。
「こうして、クロスベルは自治州として独立することが出来ました。そのために、時の自治州政府と、帝国と共和国の政治家達が連日連夜の討論を重ねました」
エリィが説明しているのは、クロスベル自治州の成り立ちだ。彼女にとっては最も得意とする分野であり、まさに立て板に水と呼ぶにふさわしい説明をしていた。
「なんでクロスベルのことを決めるのに、帝国と共和国の偉い人達が来ているか、分かる？」
「んーと……」
エリィは少し離れたところにいる、三歳ほど年下の男の子に声をかけた。と、その横に座っ

ていた同じ年ぐらいの女の子が声をあげる。
「お隣だからに決まってるじゃない」
「そう。クロスベルは帝国と共和国と国境を接している。つまり、お隣でご近所よね。だから、決まり事を決める時も、自分達だけというわけにはいかないの」
エリィのかみ砕いた説明にそれぞれ納得した顔を見せる子供達。その様子を、シスターは満足そうに見つめていた。
そしてマリアベルもまた、感嘆しつつ眺めていた。自分なら、こんなにていねいな説明は出来ない。『分からない人間に分かるように教える』ことがマリアベルにとっては苦痛以外の何者でもないからだ。分からない人間に物を教えるなど、時間のムダだ。彼女はそう思って生きてきた。
しかしエリィは、分からない相手だからこそ、言葉を尽くして分かってもらおうとする。それは彼女の祖父が、そして父が政治家だということと関係しているのだろう。
エリィが分からない子供達に教えている様子を、マリアベルは女神エイドスのようだと思いながら見ていた。愚かで哀れな人間に慈愛でもって英知を授ける。エリィが聞いたら絶句して赤面してしまうので言わないが、マリアベルの中で、彼女の存在というのはそれほど大きかったのだ。

「ここから、クロスベル自治州の歴史ははじまったのだけど……えっとシスター、これぐらいでいいですか?」
「はい、ありがとう。みなさん、大変分かりやすい説明をしてくれたエリィさんに拍手を」
みんなからの拍手を照れくさそうに受けるエリィ。そんな彼女の恥じらう顔を見て、ああいう表情も最高ですわ、とマリアベルは思いながら、誰よりも大きな音で拍手をしていた。

日曜学校が終わり、エリィとマリアベルは、約束通りエリィの家へと向かった。
用意されたお昼ご飯はパスタで、トマトベースの味付けに海産物がふんだんに入っている。
大皿にはサラダやフルーツなどが並び、彩りも鮮やかだ。
「エリィのおうちの家政婦さんは、本当に料理がお上手ですのね」
そう言ってマリアベルは、パスタに舌鼓を打った。その幼いながらも整った顔立ちからすると、ちょっとほおばりすぎではないか、とエリィが心配するほどである。
「我が家にヘッドハンティングしたいぐらいですわ」
「ヘッドハンティング?」
聞き慣れない単語に、エリィが首をかしげる。
「優秀な人材を引き抜くことですわ。お父様が使ってましたの」

マリアベルの家では、経営関係の用語が普通に飛び交っているので、こういう単語も自然とマリアベルの知識に蓄えられるのだ。

「勝手に引き抜かないで。おじいさまが困ってしまうじゃない」

そう言って笑うエリィ。しかし、マリアベルはエリィの手元にあるお皿を見て、食事があまり進んでないのを確認し、やっぱり、と内心でため息をついた。

エリィの食欲がないのは、彼女が小食だからではない。彼女が色を認識することが出来ないからだ。

といっても、目そのものが悪いわけではない。

ふたりが親友と呼べるような仲になったある日、エリィはマリアベルに、自分の秘密を打ち明けた。マリアベル以外がすべてモノトーンに見える、と。

マリアベルは彼女の（というよりも父ディーターのだが）あふれる財力とコネを使い、エリィを当代随一の眼科医に診せた。もちろん、秘密を厳守させる、という同意書付きで。エリィはそのことが祖父にばれることを、極端に恐れていたからだ。

『もしもこのことを知ってしまったら、おじいさまがとても悲しむ』

どうしてエリィはいつも自分以外の人ばかりを心配するのだろう、とマリアベルはやきもきしたが、その分自分がエリィの心配をすればいいのだ、と頭を切り換えた。

結局、眼科医による診断の結果は「目の機能にまったく異常はなし。おそらくは心因性のもの」とのことだった。心因性、と言われた時に、エリィはハッとした表情をうかべたが、詳しいことは教えてはくれなかった。

マリアベルは、薄々はそれが家庭の事情だろうとは気づいていた。現市長ヘンリー・マクダエルの息子は政治家だが、失脚し表舞台から姿を消した、という話は知識として後で調べた。そして、エリィの家には両親がおらず、親族は祖父だけ。これだけ材料が揃えば、誰でも分かることだった。

だが、彼女は詮索することはしなかった。自明なことを追求するのは時間のムダだし、なによりエリィが自分から話さないことをほじくり返すような、デリカシーのないマネはしたくなかったのだ。

「ベル？」

考え事で手が止まっていたのだろう。それまでパスタをほおばっていたマリアベルが急に動きを止めたので、エリィが心配になって声をかけたのだ。

そのちょっぴり不安そうな表情を見て、マリアベルは。

こういう表情も最高ですわ！　――そう思うのだった。

「あまりにパスタがおいしいから、どんなレシピなのか考え込んでしまいましたわ」

「あら、料理はしないんじゃなかったの?」
「できるけどやらないだけです。あんなのは、科学実験と同じですわ」
その言葉に、困った笑顔を浮かべるエリィ。そんな彼女のお皿に、マリアベルは強制的にサラダとフルーツを取り分けた。
「パスタだけでなく、サラダもフルーツも最高ですわよ。さ、エリィもお食べになって!」
「どっちの家に招かれたのか、わからないわね……」
苦笑するエリィを前に、マリアベルは今度はサラダに舌鼓を打った。

†

翌日。
エリィとマリアベルは、クロスベル市街の中心部で待ち合わせをした。ふたりでウィンドウショッピングに出かけるためである。
マリアベルはいつものようにぴったりとエリィに寄り添い、『腕を組む』というより『腕

を絡めて』歩いていた。
「ベル、いつも言ってるけど、これって歩きにくくないかしら……」
「多少の困難も、愛には必要なスパイスですわ」
何で必要なんだろう、とか、愛ってそもそもなんだろう、と哲学的なことを考えながらエリィが歩く。と、その時、何者かの肩がぶつかってきた。
「きゃっ！」
「うわっ！」
ぶつかってきたのは、エリィとほぼ同じ年の女の子だ。オーバーオールと使い込まれ、つばの折れたキャップが、活動的な印象を与える。
「ご、ごめん」
「いえ、こちらこそ」
エリィと女の子は会釈しあった。と、女の子の横にいる、少し優男風の少年が茶化す口調で言った。
「ちゃんと前見て歩かないと危ないぞー」
「隣でガンガン話しかけてきたのはどこの誰よ！」
女の子がいきなりまくし立てたので、エリィは面食らってしまった。その様子を見かねて、

優男風の隣にいた少年がフォローに入る。
「ごめん、気にしないで。ところで、ケガはない？」
「あ……平気、です」
この少年も、自分と同じ年ぐらいだろうか。栗色の髪と柔和な表情は柔らかい印象を与えるが、瞳に力があり、不思議と目がいってしまう。
「ちょっと、いきなりぶつかってきて失礼じゃありませんこと⁉」
隣で様子を見ていたマリアベルが、これ以上ないほどトゲトゲしい口調で言い放つ。ちょっと、とエリィが止める前に、その少年は深々と頭を下げた。
「本当に、ごめん！」
自分のことじゃないのに、こんなに素直に謝るなんて、とエリィはちょっとズレたところに感心していた。
「ほら、ウェンディも謝って」
「ごめんね、本当に」
「すみませんね」
ウェンディと呼ばれた女の子が、済まなさそうに頭をかきながら謝る。そして、隣の優男風の少年もそれに続いた。

「あ、ううん。気にしないで」
「まいりましょう、エリィ」
そう言ってマリアベルは、ぐいぐいとエリィを引っ張っていってしまった。
「ベル、そんなに引っ張らないで」
抗議の声をあげるエリィの言葉も耳に入らない様子で、マリアベルはつぶやいた。
「汚らわしい男に、しかもあんな頼りげないのに見とれるなんて……！」
「え？」
「なんでもありませんわ！　さ、エリィ。早くドールショップにまいりましょう！」
気分を変えるために、マリアベルは努めて明るく言って、エリィをぐいぐいと引っ張っていった。

ふくれっ面のマリアベルだったが、行きつけのドールショップに行ったことでだいぶ機嫌が直り、エリィはホッと胸をなで下ろした。
「ごらんになって、エリィ。なんて精巧で美しいのでしょう……」
そういって、ほう、とため息をつくマリアベル。ドールを見ている時のマリアベルは、いつもの理知的な面や攻撃的な面が表に出てこない。年頃の少女の顔を見せる。エリィは、そ

んなマリアベルの表情も好きだった。
「こちらは新作ですってよ。からくり仕掛けで動くとか。以前、東方もののからくり人形でお茶を運んでくるのは見ましたけど、あまり見目が麗しくなかったですわ。でも、これはかなり好みですわね」
そう言いながら、店内を歩くマリアベルの後ろをついていく。ドールショップは落ち着いた雰囲気で、外とは空気までが違っているようだった。
「はぁ～、これもいいですわね！　瞳の細工が細やか！　ローゼンベルク工房製のものにはかないませんけど、なかなか腕の良い職人を抱えていますわね」
ローゼンベルク工房とは、ドール好きの間では有名な工房である。その技術は精緻を極め、まるで生きているかのようなドールを作ると評判になっていた。
マリアベルがエリィを手招きする。エリィは彼女と並び、少し中腰になりドールの瞳を覗き込んだ。
「ほら、この虹彩を見てくださいな！　見る角度によって、少しずつ色が変わるんですの。素敵ですわね」
「……ええ、本当ね」
一瞬の間の後、同意するエリィ。しかし、その間をマリアベルは聞き逃さなかった。

「エリィ……やっぱり、まだ?」
　色を取り戻していないのか、と続けることはしなかった。ふたりの間では、絶対に他人に明かさない秘密だったから、むやみに口にするのもはばかられたからだ。
　マリアベルの言葉に、エリィはうつむき加減でうなずく。その曇った表情を見て、マリアベルは何か決心したかのように、彼女の手を取った。いつもの甘えるような、絡め取るような動きではなく、しっかりと。
「ベル?」
「……そろそろ、話してくださってもよろしいんじゃありませんこと?」
　何についてなのか、お互いに口にしなくても分かっていた。エリィがこうなってしまった原因。家族のことだ。
　エリィは一瞬視線をそらした。身内の恥をさらすようなものだ、と思い、すぐに違う、と自分の考えを否定した。
　――わたしは怖いんだ。あの時のことに向き合うのが。
　そして、いつまでも逃げられないことにも気づいていた。だとすれば、はじめて出来た親友に打ち明けるのは、ちょうどよいきっかけなのではないか?
　エリィの迷いを見透かすように、マリアベルは続けた。

「わたしたちは、親友ですわ」
その言葉に押され、エリィはうなずいた。
「どこか、静かに話せる場所、あるかしら?」

結局、人目があるお店よりかは、ということでマリアベルは自分の家にエリィを招いた。
マリアベルの自室は、ドールに囲まれている。ファンシーかと思いきや、専用の棚にずらりと並べられたドール達はある種の重厚な雰囲気すら漂わせていて、まるでドールショップのようだった。
その他の家具は、シャープな印象のものが多いが、実用一辺倒ではなく、シンプルで美しく機能的なもの、というのが集められていて、なるほどマリアベルらしい好みだとエリィは思った。
そのマリアベルは、テーブルをはさんでエリィと正対していた。手には、彼女自らが入れたコーヒーのカップ。エリィの手元には紅茶。さりげなく、彼女が好きな銘柄をチョイスしている。
「……やはり、ご両親のことでしたのね」
そう言って、カップをソーサーの上に置く。立てた音が、静かな部屋に響いた。

お茶を出した後は、マリアベルはほとんどしゃべることなく、エリィが淡々と話すのを聞いていた。それは、エリィの両親の話。政治家一族ということで少し特殊だったけど、平凡な幸せがあったこと。そして、その幸せはもう失われてしまったこと。
マリアベルがだいたい予想していたことだった。
「ごめんなさい、一方的に話してしまって」
そう言って彼女は、手元にあった紅茶をひと口飲んだ。すでに湯気は消え、冷め切ってしまっていた。
マリアベルが予想していたことと、ただひとつ違うのは、エリィが思っていた以上に冷静に語っていることだった。彼女の傷はもっと深く、心を抉っているのではないかと考えていたのだ。
それならば、こちらも明るく、あまり深刻な問題ではない、と伝えてあげることが大事だと彼女は考えた。
「お父様の元にはね、政財界にいる多くの方々から、お手紙が届きますのよ」
急な話の切り出しに、エリィは一瞬戸惑った。
「結婚しました、とか、子供が産まれました、とか、そんな他愛もないものばかり。まぁ、本当に重要なことは会って話さないといけませんから、手紙で来る内容なんてそんなもので

すけど」
「ええ」
エリィが少し困ったような表情で、相づちを打つ。真意を測りかねているのだ。
「でも気づいたんですの。離婚しました、と手紙で書いてくる人はいない」
え、とエリィの表情が固まる。
「でも、実際にはしているのでしょうね。数年前とは違う方と結婚した、と手紙を送ってくる方が、それこそ何人もいらっしゃいますから」
マリアベルは記憶力もあり、父の机の片隅で見た手紙の差出人も記憶してしまうのだった。彼女にとってはあまり使いたくない記憶領域なのだが、覚えてしまっているものは仕方がない。
「そのことをお父様に聞いても、困った顔をしただけでしたわ。つまりそれぐらい、ありふれていることですのよ。人と人の心が変わる、なんていうことは」
話しながら、これなら説明下手な自分でも伝えられると、ひとつのたとえ話を思いついた。
「愛とは変化するもの。貴金属のように永遠不変のものではないのですわ、きっと。だからこそ人は、ダイヤモンドのように変わらぬものに想いを託すのでしょうね」
マリアベル自身は、宝石は美しいと思うものの、それに想いを託す気持ちは正直分からな

かった。だが、エリィならきっと分かるだろうとふんだ。
「ですけど、残念なことに、やはり心変わりをしてしまうものです。仕方ありませんわ、人というのは移ろうものですから」
人は移ろうもの。心とは曖昧模糊としたもの。錬金術を学び、導力を学ぶマリアベルからすれば、そんな人の気持ちはよく分からない。だからこそ、彼女ははっきりと答えの出る錬金術や導力を好んだ。
「だからエリィ、離婚というのはそれほど特別なことではないと——」
「いい加減にしてちょうだい！」
最初、その怒号がどこから飛んできたのか、マリアベルは分からなかった。しばらくしてようやく、目の前で親友が肩を振るわせているのに気づいた。
「エリィ……？」
「お父様とお母様は確かに愛し合っていた！　わたしには分かる！　何も知らないのに、勝手なこと言わないで！」
ようやく心を開いて親友と呼べる人間に話したのに。
辛く暗い過去と向き合おうと勇気を出して口にしたのに。
その結果が、大好きな両親を否定されるような言葉だったことに、エリィは思わず激昂し

てしまっていた。
一方のマリアベルは、ただひたすら戸惑っていた。
なぜエリィは怒っているんですの？　そもそもこの怒っているのは本当にエリィ？
あのいつも優しく、柔らかい笑顔で微笑む彼女と、目の前の人が結びつかず、マリアベルは戸惑うばかりだった。それでもなんとか取り繕おうとし、声をかける。
「違うんですのエリィ。これは」
「もう聞きたくない！」
そう言って首を振るエリィ。彼女の目に光るものを見つけてしまい、マリアベルは自分がどうやらとんでもないことをしてしまったと気づいた。
「あの、聞いてエリィ、わたしは」
彼女を落ち着かせようとして、マリアベルは手をさしだした。その手を、エリィは反射的に払おうとして。
ぱちん、とマリアベルの頬をはたいてしまった。
ぶった方も、ぶたれた方も、何が起こったのか分からず唖然として、時が止まったかのようだった。
「……っ！」

先に動いたのはエリィの方だった。何も言わず、部屋を飛び出る。マリアベルはそれを追いかけることも出来ず、ただ呆然と、ぶたれた頬を手で押さえるだけだった。

その後、夕食も取らずにマリアベルは秘密の地下室で考え事をしていた。

すでに頬の痛みは引いていたが、彼女のショックは未だ消えず、何故エリィはあんなに怒ったのだろうと考えては、ぶたれた時のことを思い出し、また呆然としてしまう。そんなことを繰り返していた。

「いいかい？」

その声に気づき、ハッと振り替えると、ドアが開けられ、ディーターが立っていた。

「何回かノックしたのだけど、気づいてもらえなくてね」

そう言いながら、にこやかな笑顔で部屋に入ってくる。父のまぶしいほどの笑顔が、今は少しうっとおしく感じてしまっていた。

「本も広げずにぼーっとしているなんて、らしくないな」

机に向かっているマリアベルの横に立ち、ディーターは微笑みかける。マリアベルがどうしようかと思案していると、ディーターはスッとかがみ、同じ視線の高さからマリアベルの顔をのぞきこんだ。

「エリィ君のことかい？」

驚いて息を呑む。その表情を見て、ディーターはやっぱり、とうなずいた。

「彼女にだいぶご執心だったから、そうじゃないかと思っていた」

「あの、お父様……」

「うん？」

「お話、聞いてくださいますか？」

「もちろん。その前に、イスに腰掛けてもいいかな？　長い話になりそうだし」

それからマリアベルは、今日あった出来事を話した。ようやく打ち明けてくれたエリィの両親の秘密を話すのは気が引けたし、ちくりと胸が痛んだが、父ならば、と話をした。が、マリアベルが気に病むまでもなく、ディーターはすでに知っているようだった。政財界では有名な話だったのだろう。

ひと通り話を聞き終わり、ディーターはふう、とため息をついた。

「ベル。おまえは優秀だ。わたしが基本概念を理解するだけでも相当苦労した錬金術を、まるで息を吸うがごとく習得し、導力分野にまで手を広げた」

「ええ」

マリアベルは謙遜せずに答えた。そもそも、謙遜する意味がなかったからだ。お父様は、ただの事実を述べただけ、とマリアベルは思った。
「では、おまえの目から見て、わたしはどう映る?」
「お父様は、経営者としてはとても優秀ですわ。錬金術師としては凡人ですし、少しお人好しすぎるきらいがありますけれど」
娘のあけすけな物言いに、父は苦笑した。
「そう、それは正しい見方だ。だが、それを言われた側はどう思うかな?」
「仕方ありませんわ。目に現れた事象がすべて。錬金術ではそう教えてますもの」
そうだね、とディーターは相づちをうった。
「そこがおまえのすごいところであり、また弱点でもある」
「弱点?」
「人の気持ちを汲むことが、ちょっぴり……いや、結構苦手ということだ」
「そんなこと」
する必要が無い、と言いかけて黙ってしまう。今まではそうだった。人の気持ちをおもんぱかることなど必要ない。自分が上に立ち、人々を使えばいいだけなのだから。そう思っていた。だが、今困っているのは、その人の気持ちに関するところではないか。

「ベル。いまおまえの目の前に横たわっている問題は、シンプルだ」

シンプル。そうなのだろうか。自分にとっては、エリィの心というまるで分からないパズルを目の前にしている気分なのに。

「おまえは今日、大好きで大事なお友達を泣かせてしまった」

「――あ」

「目の前に現れた事象がすべて、だ。おまえが錬金術師なら、起きた事象から目を背けてはいけない」

そうだったのだ。難しく、いろいろ考えすぎていたが、シンプルなことだったのだ。

自分はエリィが大好きで、大切で。

でもそのかけがえのない人を、傷つけてしまった。

そのことにすら考えがいたらないほど、自分は混乱していたのだ。

「……そう、ですわね」

娘がゆっくりとうなずくのを見て、ディーターは頬を緩めた。

天才と呼んでも差し支えない才能の持ち主だが、この子に友達と、しかも親友と呼べる相手が出来るのだろうかと、内心密かに心配していたのだ。親友は、時に師よりも多くのことを教えてくれる存在であり、よき親友は、自分をより高みへと上らせてくれる。愛娘に、そ

んな存在が出来たことがとてもうれしかった。もちろん、それが現市長の孫娘というあたりの、政治的に『使える』意味合いも含めてだが。

「お父様、ありがとう」

「なんの。娘から友達の相談を受ける日が来るなんて、感無量だよ」

マリアベルの心からの言葉に、ディーターは少し茶目っ気を出して答えた。

「ではわたしは、どうやってエリィに謝意を伝えたらよいのか考えに考え抜きますわ。なので、出て行ってくださいまし」

え、とディーターが言っている間に、マリアベルは手元に紙とペンを引き寄せ、何かメモをはじめめた。彼女なりの作戦を立てるつもりなのだろう。

そんな様子を見て、やはりうちの娘はちょっと違う、と苦笑するのだった。

同じ頃。

エリィもヘンリーと、応接室の一角で、今日のことについて話をしていた。

こちらもクロイス家と同じようなもので、まったく食事が手に付かないエリィを見て、ヘンリーが声をかけた、というものだった。

「……なるほど」

エリィからだいたいの事情を聞いたヘンリーはうなずいた。
テーブルの上には温かな紅茶がたっぷりと入ったポットが置かれていて、それをゆっくりとヘンリーが手元のカップに注ぐ。カップを口元に近づけ、香りを堪能し、口で味わう。ゆったりとした動作の中で、ヘンリーはどう話そうか、思案しているようだった。
エリィは、マリアベルに手を上げたことをまず怒られるのだろう、と予想していた。だが、ヘンリーが口にしたのは、そのことではなかった。
「おまえは、小さい頃からおとなしくて、どこか大人たちの空気を読むところがあった」
「えっ」
「それは、我が家が政治家一家だから、仕方のない面もある。だが、子供らしさに欠けている、と感じていたのも事実だ」
突然そんなことを言われ、エリィは戸惑う。今日はやたら戸惑う日だ、と思った。
「そんなおまえが、最近とても活動的になった。日曜学校にまた通いだし、友達と買い物に出かけるようになった。なにより……また、笑うようになった」
そんなに自分は笑っていなかったのだろうか。だが、マリアベルとつきあうようになってから、自然と笑顔がこぼれるようになったのは事実だ。
「マリアベルさんは、彼女はいい子だ。利発だし、活動的だ。いまのおまえには、ぴったり

の友人だと思う」
「はい」
そうなのだ。マリアベルはいい子だ。それは、親友である自分が一番よく分かっている。
「なにより彼女は、自分の気持ちに嘘をつかない。好きなものは好きと言い、嫌なものは嫌だとはっきり言う。あそこまできっぱりとした物言いが出来る人は、そういない」
確かに、彼女が好き嫌いを口にしても、エリィは苦笑こそすれ、嫌悪感を感じることはなかった。それは、彼女が本心から言っていることだからだ。
「さらに言えば、それをしてもなお皆に好かれる、愛嬌があることも素晴らしいが……おっと、話がそれたな」
そう言ってヘンリーは、飲んでいた紅茶のカップをテーブルの上に置いた。
「ともかく、彼女の言動は、彼女が心から思っていることだ。……それが例え、お前にとって耳の痛い言葉であっても」
エリィは黙ってうなずいた。そうなのだ。マリアベルにとって、人の心とは移ろうもの。それは本心からの言葉なのだ。
聡明すぎる彼女は、パーティーの中で取り巻きに囲まれながら気づいていた。自分に取り入ろうとする子供達と、その後ろにいる親達の嘘に。人の心は嘘偽りと心変わりで出来てい

ると彼女は達観してしまっていたのだ。
「政治家をやっていると、つくづく思う。人は、聞きたい言葉しか聞かない。自分にとって都合のよいことを言う政治家を、人は『よい政治家』などと褒めそやすものだ」
そう、あの時エリィが聞きたかった言葉は、
『大変でしたわね』『かわいそうなエリィ』『元気を出してくださいな』
そんな言葉だった。だが、マリアベルから出てきた言葉は違った。両親のことを否定されて怒ったのは事実だが、後から考えれば、マリアベルが欲しい言葉をくれなかったのも、怒った原因のひとつなのかもしれない。
ただ同情されたがっていただけなんて。そう思って、エリィは少し自虐的な気持ちになり、そして自分の勝手さに自己嫌悪した。
うつむいてしまった孫娘に、ヘンリーは優しく声をかける。
「マリアベルさんの言動に、嘘はない」
ヘンリーは先ほど言った言葉を繰り返し、続けた。
「彼女が、おまえのことを心から想い、はげまそうとしたのも、また本当なのだ」
そうなのだ。エリィのことを常に心配しつづけ、話してほしいと頼んできたのもマリアベルだった。それは興味本位などでなく、本心からエリィを助けたいと願っていたからだ。

そんな風に考えていたら、胸の奥が熱く、ギュッとなった。こんな気持ちをどうすればいいのか、まだ子供のエリィは知らなかった。

「……おじいさま、わたし」

「大丈夫」

孫娘のそんな気持ちを表情だけで読み取ったのか、ヘンリーは微笑む。

「今ごろマリアベルさんも、おまえと同じように悩んでいるはずだ。それが、友達というものだよ」

「はい」

ヘンリーの笑顔にうなずき返して、エリィは紅茶を飲んだ。紅茶が身体を温めてくれるのを感じながら、エリィはどうやってマリアベルに謝ろうか、考えていた。

†

結局、エリィとマリアベルはお互いに会うこともなく、次の日曜学校の日が来てしまった。

エリィは謝ろうと思ったものの、やはり叩いてしまったことがどうにも気まずく、なかなか連絡が取れなかった。それに、おじいさまはああ言ってくれたが、マリアベルはもう自分のことを友達と思っていないかもしれない。それを確かめるのが怖く、今日までずるずると来てしまった。

エリィは玄関のドアに手をかけ、決意をする。

「……今日、話をしよう」

マリアベルが日曜学校に来ていたのなら、そこで。来ていなかったなら、押しかけてでも。なんにせよ、これ以上引き延ばしても、いいことはないと思ったのだ。

よし、と小さくうなずき、家を出る。門を出ようとしたところで、見慣れた金髪の後ろ髪が目に飛び込んで来た。

「ベル……」

その声に、通りをぼーっと眺めていたマリアベルがビクリと反応する。おずおずと振り返り、エリィの顔を不安そうに見つめた。

「エリィ……」

ここに来てくれたということは、仲直りするつもりがあるのだろうか？ それとも、絶交を言いに？ とにかく、話をしなければ——

「ごめんなさいっ！」
往来であることを忘れてしまったかのようなマリアベルの大声が、あたりに響いた。一瞬、何が起きたのかわからず、ぽかんとしてしまう。
「本当にごめんなさいエリィ。わたし、とんでもないことをしてしまいましたわ」
そう言って深々と頭を下げる。
マリアベルが、エリィに謝意を伝えようと考えに考え抜いた作戦の結果がこれだった。手紙や、仲直りのプレゼントも考えたが、自分の気持ちを素直に伝えるためには、余計なことなどしてる場合ではなかった。シンプルに、気持ちを伝えることが大事なのだとマリアベルは結論づけた。
図らずも、彼女の父がモットーとしている『大事な話は必ず会って、相手の目を見ながらするもの』を実践したのだ。
頭を下げたマリアベルに、エリィが近づく。そしてそのまま、彼女の手を取った。
「違うの、ベル。悪いのはわたしの方なの」
「エリィ……」
「わたしはただ同情されたがってただけ。本当にわたしのことを心配してくれたあなたに、あんなひどいことを」

「違いますわ！　悪いのはわたしで、エリィは何も」
「ううん、悪いのはわたしなの。本当にごめんなさい」
　そう言ってエリィも頭を下げる。その下げた顔を覗き込むように、マリアベルが話しかけた。
「顔をあげてくださいエリィ。あなたにそんな顔をさせたくて、謝っているわけじゃありませんのに」
　そう言ってるマリアベルの顔も、相当に辛そうだ。
「……ベル、怒ってないの？」
「怒る？　どうしてわたしが怒らないといけないんですの？　それよりもエリィです」
「わたし？」
「わたしが言ったことは、ぶたれて当然ですもの。まだ怒ってるんじゃないかと思って、今日はいくら叩かれても仕方がない、という覚悟でまいりましたわ」
「そんな、わたしは」
　そこでふたりはお互いに顔を見合わせた。
「……もしかして」
「仲直り……ということで、よろしいのかしら？」

しばらく見つめ合っていたふたりだが、先にエリィがフッと笑った。
「あぁ、なんだ、そうだったのね」
仲直りしたかったのは、自分だけじゃないんだ。そう思って、こわばっていた心が、一気にほどけていく。
と、マリアベルが驚く。
「エリィ、あなた……」
「え」
そう言って、頬に手を当てる。そこに流れていたのは、
「涙……?」
自分でもなぜだか分からないまま、瞳をぬぐう。そして、ぬぐいながら気づいた。
わたしは、辛かったんだ。
両親がいなくなったのも、その気持ちを大事な友達に分かってもらえなかったのも。
そしてなにより、大事な友達を失ってしまったと思ったことが。
ああ、そうか、とストンと腑に落ち、そしてまた涙があふれてきた。
「エリィ、あの!」
慌てふためいたマリアベルの声だけが聞こえるが、涙で前が見えない。

「大丈夫、大丈夫なの」
そう言いながら、涙を手でぬぐい。ようやく目が開けられるようになった。
「ごめんなさい、本当に……」
そう言って顔を上げる。そこには、自分を心配そうに見つめているマリアベルがいた。
と、そこでエリィは違和感に気づく。彼女はいつものように、美しい金髪に、紅潮した頬と、極彩色の世界にいた。だが今日は、彼女だけではない。
エリィの家の門も、立ち並ぶ家々の屋根も、花壇に咲く花も、抜けるような青空も、すべてが色を取り戻していた。
言葉を止めてしまった自分を不安そうに見つめるマリアベルに向かって言う。
「戻ってる……」
「え？」
「色が、戻ってる」
最初、何を言っているのかわからなかったマリアベルだが、すぐにその意味を理解した。
「本当ですの⁉」
「ええ。だってほら」
そう言って、花壇に咲く花を指差す。

「この花の色、今日のベルのお洋服と同じ。すごくかわいらしいピンク」
マリアベルは花壇に咲く花と自分の洋服を見比べた後、いきなりエリィに抱きついた。
「ちょ、ちょっとベル⁉」
「よかった〜〜！　ほんっとうに、よかったですわっ‼」
そう言って、ぎゅっとエリィを抱きしめる。少し痛い、と言おうとしてエリィは、親友の目に光るものを見つけて、その言葉を飲み込んだ。そして代わりに、自分も負けないぐらい、強く強く、抱きしめた。

「さ、まいりましょう、エリィ！」
そう言ってエリィの腕に自然と自分の腕を絡めるベル。エリィはいつものような少し困った表情をせず、それをすんなりと受け入れた。
「ええ、行きましょうか、ベル」
ふたりはいつものように、日曜学校への道のりを歩き出した。
「そういえば」
話しだしたマリアベルの横顔を覗き込むエリィ。
「ひとつ、訂正しなくてはいけないことがありますの」

「なに？」
「人の心は移ろう、と言いましたけど、移ろわないものもありますわよね」
「そんな」
自分のことをおもんぱかって、そんなことを言い出したのだろうか、とエリィは思ったが、次の瞬間、その考えが甘いことを思い知った。
「人の気持ちが永遠じゃないとしたら、わたしがエリィを想う気持ちすら、永遠でなくなってしまいますわ。そんなの、間違ってます！」
え、という声にならない声をあげたエリィの腕に、ぎゅっと自分の身体ごと密着させるマリアベル。
「わたしの愛は永遠でしてよ、エリィ〜！」
そう言いながら、さりげなくエリィの手に自分の手を絡ませ、あまつさえ空いている方の手で腰まで抱いてきた。
「ちょ、ちょっとベル！」
マリアベルの満面の笑みを見てエリィは、自分で親友と選んだものの、本当にこの人で良かったのだろうか、と今さらながら不安になった。

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

**アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！**



3名様

『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！　※絵柄はランダムです。

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.159プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）

2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→（記事一覧から1つずつ）

3：アンケート①『界の軌跡』詳報第1弾の印象は？
　アンケート②『界の軌跡』に登場してほしいキャラクターは？

4：希望するプレゼント番号

5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：界の軌跡最新情報

2：も～っと集まれ！ファルコム学園

3：ファルコムニュース

4：「ミュージック・フロム・イースⅢ」レビュー

5：英雄伝説 碧の軌跡 ショートストーリーズ

応募締め切り　5月28日（火）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。

月刊FALCOM MAGAZINE Vol.159

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/